

屁理屈コラム？

上沼恵美子、67歳。バラエティ番組の司会をこなし、歌手として「大阪ラブソディエー」で40万枚のヒットを出し、料理番組も持つグルメ人でもある。彼女は1971年、姉の海原万里とコンビを組み、「海原千里・万里」として漫才界にデビュー、上方お笑い大賞銀賞も受賞し実力ある本格的なしゃべくり漫才で活躍した。何しろフリートークが上手い。夫や姑をいじりながらの時事トークは、聞き手の日常の不満を代弁し共感を得てファン層も厚いというが、私には彼女に対してあまり好感度はない(笑)。

そんな彼女がABCラジオ「上沼恵美子のこころ晴天」で、SMAPの「世界にひとつだけの花」の歌詞に物言いをつけた。番組の中で北村真平アナがこの歌の歌詞に言及、「No1にならなくていい、もともと特別な**Only one ♪**」という歌詞を絶賛。これを受けた上沼は「いい歌で大ヒットしたね」と認めつつ、「いい詞やけど、突き詰めていったら『どやろ?』いう詞ですね」「ナンバーワンにならなくてもいい、オンリーワンで・・・って、慰めにも聞こえる。やっぱりナンバーワンにならんとあかんよ」とコメントした。

私はこの歌なら「僕らは世界に一つだけの花、一人一人違う種をもつ、その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい♪」には違和感があった。個性は環境や教育によって育つはずなのに「種」で決まるというのか？

だが、歌の歌詞に物言いをつけるなら、私は1980年代の卒業式でよく歌われた武田鉄也の「贈る言葉」をあげたい。まず「人は悲しみが深いほど、人には優しくできる♪」は間違いだ。自らの悲しみを受け入れることを示唆する歌詞だが、人は悲しみが深いほど優しい美しい心を失う。また「誰かがあなたを愛するでしょう、だけど私ほどあなたのことを深く愛したヤツはいない♪」はさらに酷い。このおごりはどこからくるのだろうか。無条件に誰よりも深く愛するのは親に他ならない。確かに非情な親が引き起こす事件もあるが、親の愛情を超えるものは存在しないと思っている。

昭和世代の私はやはり歌詞にこだわってしまう。人生幸朗(漫才師)が懐かしい(笑)。

今回はどうも屁理屈コラムになってしまった。

(丹羽 豊)